柏戸の真実 ⑧

親方生活スタート（中）

夢のスーパー特急

特急「いなほ」と言えば、上りは新潟で上越新幹線に乗り換えるJR特急だが、その昔は「上野直通の便利なスーパー特急誕生」だった。酒田―上野を6時間44分。鶴岡からだと6時間22分。それまでは8時間を超える夜行での車中泊が常識だった上京が昼前に出発して上野に夕方到着できる。素晴らしい特急の誕生だった。

庄内から新弟子を

開通は今から約半世紀前、昭和44（1969）年10月1日。鏡山親方から運行し始めた特急に乗せられ、半ば強引に東京に連れていかれたのが一番弟子の元十両魄龍（はくりゅう）こと大沼弘(66)だ。旧藤島町長沼地区出身。藤島中野球部の頼れる3年生捕手で「あの頃は鶴岡工業が強くて憧れた」と翌45年春の高校進学を目指していた。しかし「ぜひとも庄内出身の弟子がほしい」という親方の意をくんだ地元世話人で製材業・菅原八雄（三川町）が特別参加した相撲大会で弘少年を見そめて勧誘。鏡山に連絡、10月21日、藤島の実家を訪れた。年明け初場所後に引退相撲を控え、マゲがあった親方は31歳。羽織はかま姿の突然の来訪に大沼家は驚きつつも息子の入門に父は賛成。母は反対と真っ二つに分かれた。本人は「相撲をやったのはたまたま。好きでもない自身の「成功体験」に基づき同じ線から攻めたのだった。しかし弘は世話人による勧誘段階から中学に全く告げておらず「あした（10月22日）昼前、鶴岡駅の改札口で待つ」という親方の言葉も軽く捉え、当日は藤島中に普通に登校していた。そのため菅原が中学に迎えにきた段階で学校、担任教諭、級友たちも大相撲に勧誘されていたことを初めて知り、騒ぎになった。

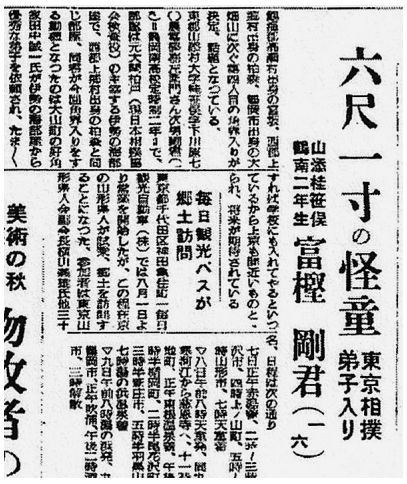
昭和44年10月23日(木曜日)

鏡山部屋に新デシ第1号

元柏戸 親方連れ22日上京

藤島中 大沼君 九州場所に入門検査

鏡山親方が対面したりつぼなからだの秘密



六尺一寸の怪童 東京相撲弟子入り

山添桂笹俣 鶴南二年生 富樫 剛君（一六）

毎日観光バスが郷土訪問

美術の秋

級友驚く急きょ上京

だが鏡山は「筋肉質のいい体つきだ。入るか入らないかは自分で決めればいい。とにかく一回東京に来て、新弟子検査を受けてみたら」と勧めた。実はこの勧誘法、自らが高1だった昭和29年秋に経験したことと全く同じだった。角界入りには乗り気ではなかったが、体験入門として上京後、稽古で先輩力士たちにソコソコ勝てたことで入門を決意した。

「大人の都合でなんで決められるんだ」と弘は戸惑うばかりだったが、父は駅頭から親方と談笑。とにかく一緒に東京に向かうことになった。

新聞辞令が先だった

外濠（そとぼり）も埋められていた。親方側が本紙・荘内日報に連絡、取材に来てもらい、ツーショットをパチリ撮られた。かくして10月23日付で「鏡山部屋に新デシ第1号」「親方連れ上京」「九州場所に入門検査」と掲載された。「いなほの車内で何を話したか？ 子どもだったし、上の空で何も覚えていない。父親と親方は何やら楽しそうに話しているし、俺の将来いったいどうなるの？だけだった」。

振り返ってみれば親方自身、体験入門せざるを得なかったのは当時の伊勢ノ海部屋の地元世話人が新弟子候補として富樫剛少年を荘内日報に紹介。「山添の怪童入門」と報道され、引っ込みがつかなくなったからだった。15年の時を超え師弟とも「荘内日報に背中を押される」同じ舞台設定で角界入門が進められていた。

＝敬称略＝

（富樫 嘉美）

鏡山部屋の県出身関取、蔵玉錦（左）、魄龍に囲まれた鏡山親方。白い稽古まわしは関取の証し

大沼の入門を告げる昭和44年10月23日付と富樫入門の昭和29年9月7日付。こちらは地名は桂〝笹〟俣ではなく桂荒俣。学年は〝2〟ではなく1年。掲載を慌てたのか!?

毎週火曜日付に掲載